も、多くの魚が「なむら」をなして押し寄せたであろう昔はもう知る人もほとんどない。イワシさえ沖に出なければ網にはいらない。もはや元に返らぬ自然であろうか。

注1、春野村への合併の時、役場位置で難航したが、現在位置に決定したのは、その後の発展にとってまことに好条件を創出したことである。

〃2、地質構造と地形との不一致は、変化して止まなかった地球の長い歴史からであろう。

〃3、高知市朝倉方面には洪積層の堆積台地があるが、春野町には洪積層の堆積を地上で見ることができない。不思議である。

〃4、東西方向の地形、地質と、南北方向の川の流路との枠組は、一体どういう地殻変動で生れたのであろうか。

〃5、弘岡上行当のクセイ谷の雑木林は、往古の原始林―御留山を語るように繁茂している。

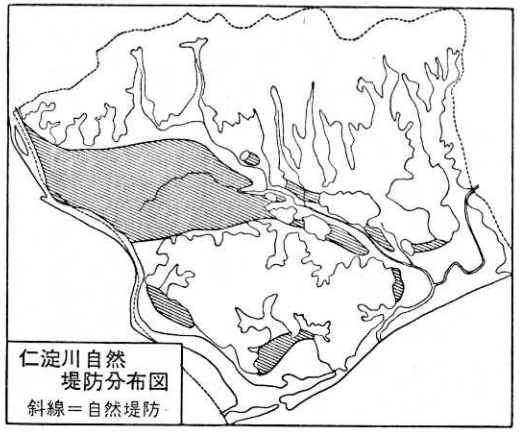
〃6、合理的―近代的教育が、人間の力を自然征服として教えたことに、問題があるのであろうか。

原始・古代編

原始の春野

米作りの開始—山根遺跡

鮒取新兵衛　いまは豊かな農村生活と、便利な都市周辺生活とが仲よく共生している春野町に、はたしていつから人びとが住みはじめたのであろうか、ぜひ知りたいことである。もちろんこうした古い昔のことについては、歴史の研究にいつも使う記録というものはない。文字も使われていなかった時だからである。したがってその研究は、昔の人びとが使っていた道具か、住居の跡を地中から掘り出して調べるのであって、これを考古学とよんでいる。戦前からも少しづつこの学問は研究されていたが、戦後急に発達することになり、春野町の古い昔もこの学問によって大分はっきりしてきた。ことに町の教育委員会が、高知女子大学の岡本健児教授を団長として行なった昭和四十八年（一九七三）十月と、翌四十九年（一九七四）二月の秋山山根の発掘調査、さらに同四十九年（一九七四）八月の西分馬場末の発掘調査は、多くの出土品を得て成功を収め、春野町の歴史に貴重なページを加えることになった。以下はすべてこれらの結果に基づいて説明するものである。



仁淀川自然堤防分布図
斜線＝自然堤防

いまから一万年ほど以前には、春野町の低地の部分は、ほとんど浅

い入江によって占められていただろうことは前述したが、こうした入江は年々歳々に仁淀川本流とその分流、それに北部山地や南部丘陵から流れ出る溪流によって埋められ、しだいに陸化してくるが、多くはなお入江の状態が長くつづく。何千年にわたってである。しかしそうしたなかで、まず自然堤防といって、洪水のたびに堆積する土砂で川のへりに細長く連なる土地ができる。もちろん大洪水には水に覆われるが、そうでない時は、わりと洪水を避けることのできるよい所である。それとは別にまた、溪流が低地に流れ出るところに、扇状地という土砂の堆積地ができる。ここも住むにはよいところである。

人が住むにはしかし何といっても食料である。春野町では今こそ自然の姿はかなり変ってはいるが、今から五千年前には山野に自然の食料が多かったであろう。川にはあゆ、ふな、こい、ごり、うなぎが豊富であり、海にはまた貝類や海苔類、いわし、ぼら等が多く、沼地にはかもやしぎの類が冬はやってくるし、同じ時期に山にはつぐみなどの小鳥が飛来した。もともと山には年中いのししやしかもいたにちがいない。自然の与えてくれた食料は、このほかしい、かしの実、やまいもなど植物性のものも多い。ほとんど食料としてはことかかなかったように思われる。

すこし後のことであるが、春野町が自然の与えた食料にどんなに富んでいたかを示してみよう。「長宗我部地検帳」の森山分（実は秋山村）に

北イヲキ　　同　　鮒取新兵衛給
一、壱反　出卅七代　　同　し（喜津賀分）
上ヤシキ

この付近には「フナ神ニ良る」と、またふなに関係のあるものが住んでいる。ここは前述発掘の行なわれた秋山山根付近であって、もちろん読者のご承知の町役場の南方約二百メートルの所であって、西を小丘陵をもって囲

まれた段丘状の土地であり、北を新川川が流れている。新川川が仁淀川の分流であったことには誤りはなく、もっともっと大きい川であったはずである。多くの魚族が棲み、その魚を捕えて長宗我部氏に貢納した者が、「鮒取新兵衛」「フナ神二良」である。地検帳のころはこれらのいわば鮒一族が、川の利用について土地と権利とを与えられていたのであろうが、長い間を人びとは、自然の与える食料を自由に利用したものであろう。また「細川義昌日記」明治十四年（一八八一）三月十八日によれば、細川一家は甲殿へ磯草―海苔を採りに行く。

百足海苔大付きにて壱荷取り帰る、一同殊の外大愉快々々々。

と浜遊び―汐干狩りを喜んだのであって、このように季節々々に天の与える食料があったので、じゅうぶんとは云えないが、生活のなりたたないことではない。人びとは入江のなかから出てきた自然堤防や、扇状地など住み心地のよい所に住み家を求めて暮していけるはずであった。だがこの数千年前の時期―縄文時代という―には、なぜか春野町に人びとが住んだという証拠はない。つまり縄文時代の人びとの残した遺物、遺跡がないのである。貝塚も土器もまだ発見されていないわけである。昭和四十九年（一九七四）七月春野町公民館での講演で、岡本健児氏は、土佐市野田から約四千年前の益野式土器が発見され、さらにまたすでに伊野町大テギからは石斧の発見があり、前者は縄文後期、後者は縄文晩期である。したがって春野町からもいずれ研究が進めば、縄文時代の遺跡、遺物が発見されようといわれる。いまはそれに期待することにしよう。郷土の歴史が悠久の昔から始まり長い年代をへて今日を築いたものであることは、これを受け継ぐものにとっては感銘の深いものである。ことに同氏によれば、縄文時代の後期、晩期は漁撈的文化が顕著であるという。春野町の自然条件にまことに適合するのであって、前記鮒取の起源に連なるのであるが、さらにこれはつぎの米作りとも無関係ではない。鮒取りの地にまず米が作られたからである。

木塚明神宮北方より山根を望む

山根遺跡　戦後の考古学的研究は春野町にも及び、春野町教育委員会編の「春野町史」稿本には、すでに

十田の山の弥生式土器

昭和三十八年六月二日、長谷の垣内楽さんが甘藷畑をうね作っている時、鍬の先に当ったのが春野村では最も古い、弥生式土器であるらしい。完全な形で出たのだが、最後に掘り出す時こわれたのは大変惜しい。三種類位のつぼである（略）

このほか「弘岡上奥谷の弥生式土器」についても記しているが、何といっても、

秋山山根の弥生式土器

村役場の南方約二百五十メートル、川島良水さんが漬物場工事中に弥生式土器が発掘された。十田と余り遠くない土地で、このあたりにも人間が住んでいた事は事実で、種間寺の縁起も単なる伝説でないことが証明される。

と感激的に述べている。この山根が前記鮒取の住所付近であり、以下述べる記念すべき発掘の行なわれた所である。

山根遺跡と称せられるのは、山根とこれに隣る石ヤシキを一括して命名されたものであって、この遺跡発掘の意義は大である。第一回発掘は、当初弘岡中後田遺跡の発掘から開始されたが、同所が住居跡とは無関係であったことから、山根に切換えての成功であったが、まず第一回で山根Ⅰ式土器が発見され、春野町が中村市入田、南国市西見当とともに、高知県の米作りの三伝来地として確められたことである。もちろん米作りはまず北九州

へ、それから全国に拡大したものであって、高知県へは入田から西見当へと考えられていたものが、秋山山根と順序よく西より東に及んだことになる。これは農業地春野町としては重要な意義を持つものである。

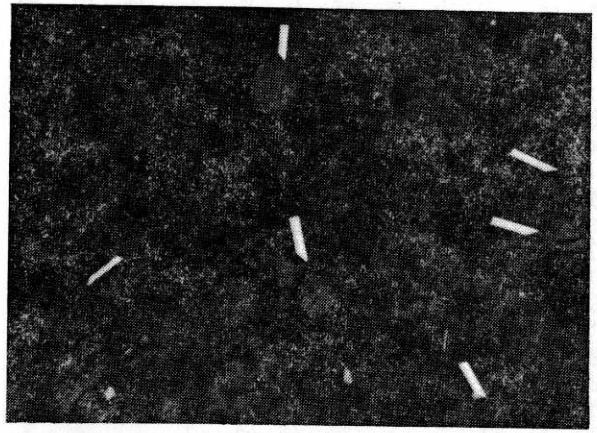
山根Ⅰ式土器について、岡本健児氏は「月刊考古学ジャーナル九〇号」で解説されているが、抄出すれば

遺跡は高知県の中央部、吾川郡春野町秋山山根である。前期前半の土器は数片発見されているにすぎない。それも壺のみである。口縁部は肥厚部がみられ、肥厚部の下に篦描沈線を持ち下腹部に篦描羽状文を持つものである。重弧文もあると考えられるが未発見である。これらの壺は、入田Ⅰ式の壺とやや異なった、そして従来南四国東部に発見されていた西見当式よりも古い要素があるところから、山根式Ⅰとして仮称したわけである。

土器学関係の専門的な表現であるが、入田Ⅰ式土器と西見当式土器の間に、山根Ⅰ式土器の時代があるのであって、そこから米作りが、西方の入田から山根さらに西見当へと伝来したことが考えられるものと思われる。

山根は前述のように新川川―旧仁淀川分流沿いの典型的な自然堤防である。西分増井の木塚明神宮北方から遠方すれば、二―三段の段丘状に展開するこの地域が、人びとによい住所を提供したであろうことがよく理解されよう。

岡本氏によれば、山根遺跡からは、三期に区分される弥生式文化五百年間の、代表的な土器九種[1]―がいずれも発掘されたうえ、さらに歴史時代になっても集落として生き、室町時代の遺物―石鍋等も



山根遺跡弥生式土器出土状況（広田典夫氏提供）

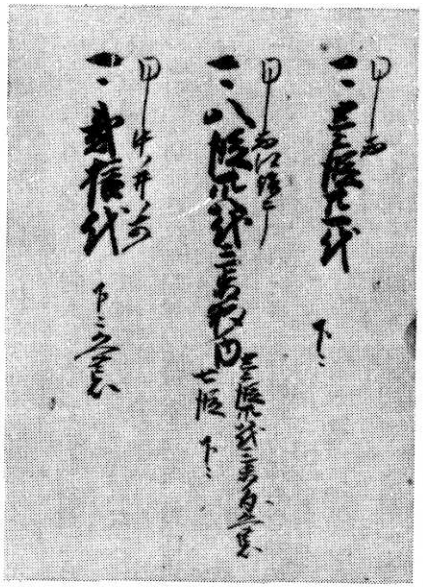
発見されたのであって、春野町としてはいよいよその価値の大なるものであるが、第二回の発掘調査で、なお第三次調査によって確める必要があるとはされながらも、弥生文化前期後半―約二千百年前―の四国で最初の竪穴住居跡の発見は朗報であった。それによれば、地表から約二・五メートルの所に住居跡とみられる床面が発見され、また柱が打ち込まれたと考えられる直径二十センチメートル、深さ三十センチメートルほどの竪穴二つと炉跡が見つかる。しかも床面からは、高知県で最初の弥生式前期後半の糸紡ぎ用オモリと、大篠式土器が発見され、この大篠式土器によって以上の住居跡が弥生式前期後半のものと断定されたものである。なお岡本氏によれば、以上の住居の床面は、北九州の様式に近い隅丸（すみまる）方形（だ円形）と推定されるが、尾根が切妻か、それとも入母屋造りかはわからないという。さらになおいくつかの住居跡もあると考えられるが、すべては第三次の発掘調査にかかっているわけである。

山根に住んだ人びとは、川で魚貝類を捕えて食するとともに、木の皮で糸を紡いで衣料とする。また自然堤防に近い所で、海岸より約四キロメートル遡る塩分をさけたといわれるが、以上の発掘調査によれば、山根にはたびたびの洪水が訪れている。おおよそ紀元前百年頃、紀元頃、紀元百年頃、さらに同二百年ごろと推定されている。これらは砂礫層の堆積によって確かめられるのであって、また砂礫層の上には下とちがう土器が発見され、それによって時代の推移が辿られるものである。今は新川川は山根の北を流れているが、当時は南を流れていたこともあったというのである。仁淀川分流は山根付近の小丘に妨げられながら、南に北に抵抗の弱い所を乱流したのであって、近い時代の大洪水の記録からも自然なことである。時折の大洪水に苦しめられながら、人びとは、生活の場をたがいに力を合せて築いていったのであろう。貧しさはひどく生活は苦しいものであったが、人間は家族や隣人を愛することができる。これは大きな喜びであったはずである。以下その後の人びとの生活を支

える米作について考えることにしよう。

江と切畑

江　山根発掘後さらに西分の馬場末で行なわれた発掘調査では、弥生文化後期の三世紀頃と推定される「ツボ棺」が発見され、当時の乳幼児の死体を入れて土中に埋葬したものであって、人びとの生活も心情も豊かになってきているが、また山根にかぎらずこの地も自然堤防に立地していることがわかり、同様の地形はようやく人びとの占拠するところとなったのであろう。しかしこれとは別に、弘岡上小杉原、弘岡中荒倉園芸高校果樹園、西分ヒョ谷等のやや高所に遺物の石器等が発見され、紀元二世紀後半の、いわゆる倭国大乱と関連する高地集落関係ではないかと考えられる等、洪水のほかに今日われわれの想像を超える変遷もあったと考えられるが、この二世紀後半期に位置づけられる西畑吹家の銅鉾について記しておこう。弥生時代には金属器も伝来したからである。



「江」（喜津賀東分地検帳所収）

前記「春野町史」稿本には、西畑吹家（ふけ）の銅鉾について、

西畑吹家の崖から、明治十二年銅鉾が出ている。これは豪族の家宝として代々伝えられたものと考えられる。其

の後盗難にあい切断されたが、現在柄の部分と剣先が残っている。

というのである。今は村人によって小祠が建てられ、残存部分が祀られているが、盗んだ者は金になると考えたという。笑い話と思ってはならない。貴重な文化財が骨董品として高価な商品に取り扱われているのが現状である。無残に切断された銅鉾の断片を見て、現時点での文化財の運命を考えさせられたものである。

右の「豪族の家宝」云々の点は後にまわし、最初の水田として利用された江について語ろう。「長宗我部地検帳」には、江に関する記事が春野地方にもきわめて多い。以下繁雑であるが、多くの例を列挙してみよう。

西分応瀬村に

同しノ東江フチ　同村　大寺領
一、弐拾五代弐歩　下畠　同　し　五郎兵衛作

また西諸木には

同し江フチ　同し
一、卅代　出十四代壱分　下　岩川源十郎給

また内谷でも

同し東エ懸テ　同　同村　市左衛門扣
一、壱町拾代　出壱段壱代五歩　下　慶雲寺領

また東諸木にも

同し東江詰テ　同　同村　同し孫左衛門扣
一、弐十代　出弐拾代　下々畠田　同　し

芳原にもつぎのように出る。

同し西江詰テ　同　同村　新衛門名
一、参十代　出拾三代　下　同　し

弘岡中にも

西川エソエ　同　□介作
一、弐十代　出弐十五代五分　上畠タ　枝末名

弘岡上にも

大谷川内江ソエ　大谷川内　主作
一、十五代　出十三代壱分勺　上　楠瀬源衛門尉給

また弘岡下にも

ホウセンノ南江縁　ホウセン　孫三郎□
一、弐十代　出四十代五歩勺　下々畠　下村　鶴石名

森山には比較的少ないが、それでも秋山に近く、

同し東江ヲ詰テ　同村　今ハ岡本名
一、卅代　出十代　下　内廿代アレ　光吉名　喜津賀分　かち新兵衛作

秋山にも

同し江ノ東　同村　左衛門二良扣
一、拾代　出七代　中　同　し

仁ノには

仁崎ノ前向江懸テ　同村　則七介扣

一、弐反弐拾五代　下　内四拾代久荒壱反卅五代作目　同　し

西畑にも

同しノ北フケヱヨリ東

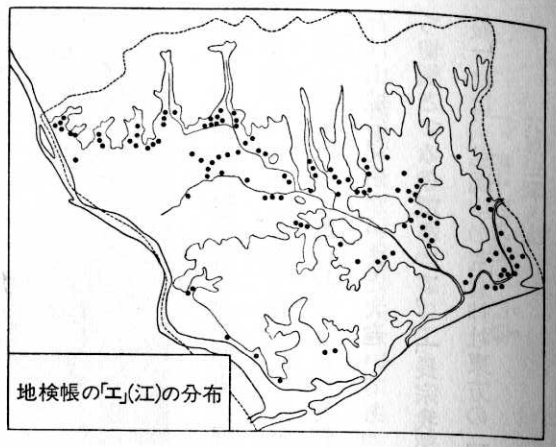
一、四拾代出拾壱代名分中　同村　彦左衛門扣

同　し

読者はうるさく感じられるだろうが、これはほんの一例にすぎないのであって、それこそ応接に暇のないように出る地域もある。中には池とあるが、これも江と同様である。

さてこのような江を切図に照らしてみると、実はたいてい前述自然堤防の周辺に分布する。それもどちらかといえば、自然堤防の背後で山脚の間に彎入した低地の部分である。おそらく、検地段階でなお埋め残されたかつての入江の部分であろう。いまはこれらの地域もすべて埋められてほとんど江はない。しかしながら注意すれば米の減反改策実施時、真先に休耕となり、水草茫々であったのは、たいていこの江であった部分のようである。現在では利用度の低い所であるといえよう。

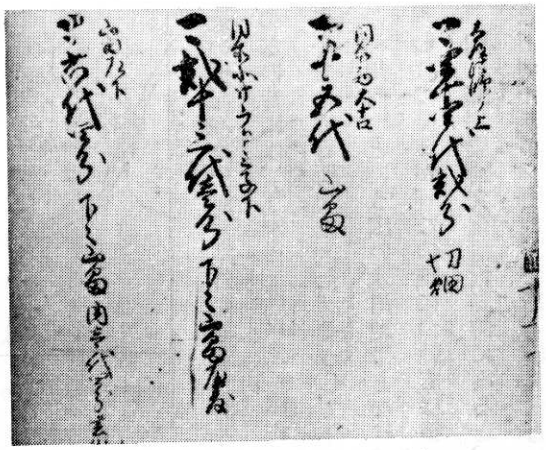
そうした地域を、なぜここで取り上げるのか疑問とされる読者も多いであろうが、それには理由がある。江の周辺の低湿地に真先に水田が開かれたと考えるからである。すなわち現在生産力の高い自然堤防は、当時は部分的に集落には利用されたが、けっして水田にはならなかったのであった。ではなぜ最初の水田は低湿地に開かれたのであろうか。これは灌漑を考えてのことである。いねは水稲耕作といわれるように、まず原則として水が必要である。ところでその水はいまは用水路を流れているが、米作りが伝来した時からそうであったわけではな



い。弘岡井筋が野中兼山によって開かれるまでは、春野地方には畑が多かった。用水路の構築はもちろん兼山よりもずっと以前に開始になるが、古墳時代以後であって、米作り伝来当時は、低湿地に自然灌漑―無灌漑施設で米を作る。天然の雨水、あるいは湧水の利用である。農具もまだ木製、石製であった当時である。用水路を造ることはむつかしい。江に沿う湿地を耕やして直播きでいねを育てる。熟すると穂だけを石庖丁で刈り取って米にする。あとはそのまま放棄してまた翌年と、これを繰り返したのであろう。

さて江に沿うた低湿地であってみれば、雨が多いとたちまち水びたしになる。いくたびか収穫皆無を経験したことであろうが、天候が順調な時は相当の豊作でもあった。「長宗我部地検帳」をみると、これら江に近い低湿地水田が、案外に「上」あるいは「上ノ上」と高い生産力の位置付けを受けているのであって、用水路のない昔には、今のように真先に休耕される所では、けっしてなかったものと思われる。人びとの希望をつなぎ、喜憂を分ける所であった。そうして年を重ねて米作が定着するにつれて、低湿地ながらも弘岡上、同中で地検帳の「川内」という広い水田地帯となり、生活は安定し、食べても残る余分を生じ、やがて村々には大きな変化が現われてくるが、この点については後述することにしよう。

切　畑　農耕文化は世界的にみると、数十万年にも及ぶ漁猟採集時代―旧石器文化―が発展し、今から一万年ほど前オリエント地方で新石器文化として、はじめて生れたものである。日本の縄文時代はこの新石器文化に属



「切　畑」（弘岡村地検帳所収）

しているが、不思議なことに農耕文化はまだ確かめられていない。弥生時代の米作りで、日本は今からやっと二千三百年ほど前に農耕文化にはいったというのである。この点には疑問を持つ人もあって、縄文文化の末期には、さといもなどを作る農耕のあったことを考えているようであるが、なお確かではない。ところでこの縄文末期の農耕文化を考えるとき、指摘されるのが切畑―焼畑である。焼畑は日本に限らず世界各地にある原始農法で、農耕の起源としてはふさわしいものである。樹林を伐採して焼く。焼いたあとにひえ、あわ、きび、まめ、いも等を作る。数年で土地が瘠せるとまたもとの林地に帰すのであって、戦前高知県は日本一の焼畑の耕作地であり、今でも吾川郡池川町椿山等には行なわれているという。もちろんこの切畑の作物には、永い歴史発展による種々の変遷もあるが、その基本的な耕作法はたしかに原始的とはいえよう。

さて春野町は平野の村である。切畑などはもちろんないと考えられよう。しかし事はそう簡単ではない。実は昔は山地の利用がいまと大違いであった。[2] 山は森林として利用するよりは、やはり農業として利用する。すなわち切畑とするのであって、「長宗我部地検帳」には、この点まことにはっきりした記事がある。「弘岡村地検帳」には、弘岡中の荒倉神社東方の「東ナコロ」に、

大道法師ノ上　荒鞍　東ナコロ　神主抱
一、四十四代弐分　切畑　荒　鞍　分　八衛門作

またここから数筆はなれて

栖本ハヤシ二カ所カケテ　荒鞍　源衛門作
一、五代　切畑　同　分

右の作人の「八衛門」については他に記していないが、「源衛門」については、

同所（菊ノ谷）ニシ出八代壱分　同（荒鞍川内）神主給
一、十六代　下ヤシキ　荒　鞍　分
源衛門□

とある。右の「源衛門□」は「源衛門居」であろう。源衛門は荒鞍神社の神主の給地―領地―内に、屋敷を与えられ切畑を耕しながら神社、神主の雑用をするいわば隷属農民であった。それはそれとして、切畑と明示したのは春野地方にはこの二筆のほかにはない。しかしながらただの二筆ではあるが、これが神社―神主関係で出るのは意味があると思う。伝統的な山地利用の姿が残されていると思われるからである。もっともたとえば右の切畑に近く、

六王谷　荒鞍川内　神主扣
一、三十代　山畠久荒　散　田

等の「山畠久荒」は切畑耕作の放棄されたものと考えられるので、このような「山畠」「下山畠」「下々山畠」には、切畑とみなされるものも多く、春野地方の北部山地、南部丘陵は切畑として利用されたことも多かったと思う。ただ低地が広いので、吾北の山岳地方のようではもちろんないはずである。

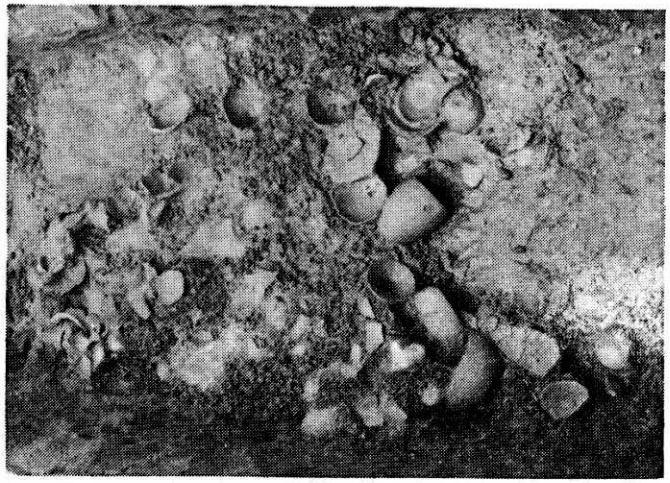
これらの切畑が、原始農耕としてすでに縄文末期に日本で生れていたとするなれば、このうえに米作りが加わったのであるが、また米作りと前後して畑作として伝わり、それが自然堤防のほか、東ナゴロのような緩傾斜の山地利用として、別の道を辿ったこともないとは云えでないであろう。たとえば弥生末期の高地集落との関係もある。いまは筆者にはこれ以上述べる力はないが、いずれにしても弥生時代約五百年間に、水田も畑作も発達したのであって、おそらくは少々の牛馬も伝えられ、これがつぎの時代への条件となっていく。以下古代にむかって進むことにしよう。

古代の春野

馬場末遺跡と吾川国造

馬場末遺跡　大陸文化の影響で急速に発達する日本は、いわば一種の疾風怒濤の時代のように弥生時代進展を逐げ、紀元第一世紀北九州には、中国の後漢の光武帝より金印を授けられた奴国が現われ、さらに第三世紀には有名な邪馬台国も出現し、ついに第四世紀には大和朝廷による日本統一の推進となるが、四国山脈により中央から隔絶した土佐では、そうした歴史は伝えられていないが、後述のように第五世紀頃には土佐国造も現われる。土佐国なりの統一が進んでくるが、春野についてこの点で注意されるのは、馬場末遺跡の発掘であって、その成果はまた山根遺跡に劣るものではない。すでに第三世紀のものと考えられる「ツボ棺」について述べ、時代とともに人の生活にも心情にも豊かさが加えられたとしたが、馬場末遺跡より出土した大量の土師器が―馬場末土器

が注意される。深さ約四十センチメートルの所から出たもので、第五世紀頃のものという。「高知新聞」昭和四十九年（一九七四）八月八日号は、発掘結果を報告した岡本氏らの記者会見に基づき、土師器について説明する。素焼の茶褐色の土器で、かめ、つぼ、こしき、たかつきなど当時の日常生活を示すものである。こしきは米を蒸すものであったので、当時の人びとは米を蒸して食したことになる。今とはちがっている。たかつきはさまざまな物を盛るものであるから、食料もしだいに豊富になってきたのであろう。また前述小児を埋葬した壺棺もでた。心情も豊かになってきたものである。



馬場末遺跡土師器出土状態（広田典夫氏提供）

そのうちとくに「手づくね土器」といわれる祭器があった。これは弘岡中の後田でも発見されたのであって、岡本氏は川の神を祭ったものと推定され、馬場末でも近くを流れていた川の神を祭ったものであろうといわれる。馬場末は南に新川川、東に長谷川と川に近い。洪水も恐しいが、魚貝類も多く天恵でもある。もともと馬場末そのものが、以上の両川により挟まれた前述自然堤防である。西を町役場庁舎背後の丘陵台地によって保護され、洪水の際の土砂の堆積は、丘陵の末端を起点として進んだものである。そうした理由とは別に、太古の人びとは素直に川を怖れそして敬って神として祀ったことであろう。ところでこうして第五世紀頃ともなれば、大量の土師器によって代